

客員教授としての使命

国際協力事業団 三好 皓一
(客員教授I種、任期：2002年6月1日—2003年3月31日)

国際開発援助を取り巻く環境は大きく変わってきています。特に2000年にミレニアム開発目標が国連総会で採択され、開発途上国政府はこの目標を自国の状況に置き換えて開発に努めています。このような動きは、貧困削減戦略書やセクター・ワイド・アプローチなど近年の開発援助の枠組にも反映されています。また、開発途上国は、開発目標を政



策として具体化することによって、オーナーシップを醸成するとともに援助機関やNGOとのパートナーシップの強化に注力しております。このような状況は、わが国の援助枠組や手法に対しても変革を求めてきています。成果を重視した協力が求められ、このために一層の援助政策の明確化の必要性、また、評価の重要性が強調されてきています。

私自身は、当センターの客員教授として、このような状況を踏まえ、農業分野における援助のあり方を検討してみたいと考えております。具体的には、わが国の援助の経験をこのような変化する開発援助の枠組にどのように結び付けたいか研究してみたい。従来のプロジェクトを主体とした技術協力を、いかに開発途上国の政策体系の中に位置付けていくことができるのか、また、開発途上国の政策体系に対してどのように介入していくことが適切なものか、このような設問について事例を取り上げ検討してみたい。また、そのような活動の評価手法を研究していきたいと考えております。

ICCAEへの御礼

タンザニア・ソコイネ農業大学
T.J.Msogoya
(客員教授III種、任期：2002年5月1日—7月31日)



私は、2002年5月から7月31日までの間、ICCAEの客員研究員として招待されました。私の最初の活動は、「アジアにおける持続的な農業システム」というテーマのサテライトフォーラムで、「農業開発と人材育成のための南々協力を含む国際協力に関わるAICAD（アフリカ人づくり拠点）プロジェクトの経験と展望」についての論文を準備し、発表することでした。このフォーラムは、名古屋大学大学院生命農学研究科で2002年6月21日に開催されました。次に、私は北川教授と共同して、「農業分野における南々国際協力の分析」の研究に取り組みました。この研究結果は、名古屋大学大学院生命農学研究科で2002年7月24日に開催された、ICCAE第5回オープンセミナーで報告しました。ICCAEは、協力的で思いやりのあるスタッフが揃っていて、研究設備も優れています。私の研究は、北川教授による数限りないご支援と励ましがなかったなら、うまくいかなかったことでしょう。彼は、実に研究しやすい環境を私に作ってくれました。

略歴 1965年生まれ。現在 ソコイネ農業大学講師。
1993年 ソコイネ農業大学卒業。
1998年 フランス国立園芸科学大学大学院修了。園芸科学修士。
1998年 ソコイネ農業大学に採用。

略歴 1947年生まれ。現在 国際協力事業団国際協力専門員
1971年 早稲田大学経済学部卒業。
1976年 国際協力事業団入団。主に、事業団の政策・戦略策定、プロジェクト・プログラムの形成・管理・評価等に携わる。
1990—1991年 ハーバード大学客員研究員。
1995—1998年 アメリカ合衆国事務所長。
1998—2002年 企画評価部次長兼評価監理室長。

編集後記

本年第2号のICCAEニュースをお届けする。今回の主な内容は、名古屋大学国際フォーラム及びそのサテライトフォーラムの紹介である。「新世紀を築く大学の英知」をテーマにした国際フォーラムは、コミュニケを採択して終了した。誌面の都合で全文を紹介することはできなかったが、国際的ネットワークの構築、定期的なフォーラムの開催、学生・教職員の交流、研究情報の共有、連携教育プログラムの開発を目的とする国際学術コンソーシアム(AC21)が創設された。名古屋大学は、このネットワークの中核機能を果たすことが予定されている。各部署においても積極的な活動が行なわれており、国際的な研究・教育拠点を目指している。本センターとしても、微力ではあるが、農学分野の人づくり協力の国際的拠点を目指して活動を続けている。皆様の暖かいご協力・ご支援を期待するものである。

(協力ネットワーク開発研究領域・武田 穰)